

プレハブ

仮設事務所の中で散った初恋
隙だらけの美術少女はやっぱり田舎でNTRれて

八ヶ岳昌司

プレハブ
仮設事務所の中で散った初恋
隙だらけの美術少女はやっぱり田舎でＮＴＲれて
（本ファイルは体験版となります）

小説本編に入る前に、まずは特典画像をお届けします。

『ストーリー・サービスショット』

作品世界の世界観、イメージを膨らませてもらうためのサービス画像です。
本編のストーリーとは必ずしも一致しているわけではありませんが、ヒロインの運命を示唆する予告編（プレリュード）として楽しんで頂けたら幸いです。



友達のいない孤独な美少女はなぜ人気の無い場所に惹かれてしまうのだろうか。



人とは違う感性を持つ個性的な少女。アートへの興味と好奇心が彼女を辺鄙な場所に惹きつけて止まない。



誰も理解してくれなくても、彼女は自分だけのアートを描くためインスピレーションを探し続ける。



夏の終わり。人の目の届かぬ小屋の裏。
いずれはこんな日が来るのはわかっていた筈なのに。
ここに通い続ければ、やがてこんな光景が現実になるのは想像出来た事なのに。
でも少女は、自分にそれが起きることが信じられなかった。
気が強く、夢があり、芸術への信念を曲げず、だからこそ友達は居らず、周囲から浮いた自分。そんな自分にそれが起きることが信じられなかった。
信じられなかったからこそ、少女は毎日そこに立ち続けた。まるで何かへの挑戦のように。
そしてある日、それは現実になった。
言われるままに後ろを向き、少女はごくんと唾を飲み込む。パンツの上から尻を触られ、少女の鼓動が速くなる。
ああ、本当に起きたんだ。わたしみたいな女にも。この人達、わたしみたいな女で、本当にいいのかな。
ある日の夕方。どこでもある日常の中の夕方。町のどこかでは子供達がお母さんと幸せに夕食を食べている、そんないつも通りの夕方。
けれども少女にとっては、自分のすべてが変わってしまう運命の日になった。

体験版につきストーリー画像はここまでとなります。
製品版にはエッチシーンの画像が追加されています。

これより体験版小説となります。
冒頭の４章を掲載しておりますので、お楽しみください。

私が真梨と初めて言葉を交わした時、私が持った印象は「変わった子だな」というものでした。なんと言うのか、少し喋り方がぶっきらぼうで、眼つきのきつい女子生徒でした。

けれども絵について話していると、ふっと表情が柔らかくなる瞬間があり、私は思わずドキっとしたのです。表情がきつく、どことなく険しい印象があるので、人を寄せ付けず友人も多くありません。男子生徒の間でも取り立てて人気のある方ではなく、どちらかと言えば目立たないタイプの女子でした。

そんな彼女の魅力に私が気付くまでには、何年もの月日が必要でした。それは私の恋愛に対する意識の低さも原因かもしれません。市内で唯一の進学校に通い、受験勉強を最優先に考えていた私にとって、女の子と付き合うなどという事は頭の中になかったのです。ましてや私はもともと照れ屋で小心者ですから、女子生徒と会話するだけでも勇気が必要です。

私が真梨と話す機会を持てたのは、人数の少ない美術部で、絵を描きながら一緒に過ごす時間が長かったからです。部員はたったの5人。部員たちは皆真面目で、それぞれの作品を仕上げる事に専念するため会話は少ないのですが、たとえ短く事務的なやりとりであっても女子との会話が日常の中にあるというだけで私には新鮮な経験でした。

私が彼女に告白したのは、三年の夏休みが明けた日の事でした。

私が運動神経の無さから卓球部をあきらめて美術部に転部したのが一年の秋の事ですから、初めて真梨と言葉を交わしてから実に二年近く経っていたことになります。いつから彼女の事が好きだったのか、それは自分でもわかりません。けれど好きだという気持ちを意識したのは三年の夏を迎えた頃です。

真梨は身長が１６４センチあります。女子生徒の中では比較的背が高い方でした。それとは逆に私は１６５センチしか無いので、隣に立つと背が並んでしまいます。入部したての頃、座って絵を描きながら、ふとした時に立ち上がった彼女の背の高さに私は圧迫感を覚えました。身長は同じくらいですが見下ろされるような感覚でした。

男のくせに女子に見下ろされるという事を意識して、私は初めて自分の身長にコンプレックスを持ちました。それまでは背の高さなど、あまり気にした事が無かったのです。

けれども次の瞬間、スカートに手を添えて座る彼女の仕草を私は見つめ、私の目には真梨の大きなお尻と、その丸い形が飛び込んで来ました。それはまるでスローモーションのようでした。椅子に座る彼女のお尻と、紺色のスカートに包まれたその質感と重量感。私はそこから目が離せなくなり、絵を描いている最中もちらちらと横目で眺めていました。

私は一目惚れというものはあり得ないと思っています。恋愛というのは時間をかけてお互いの事を知り、性格や人間性を知る中で好意が育まれるのだと思います。けれど真梨に初めて会った時、私は知らず知らずのうちに彼女のお尻を盗み見し、帰宅してからも彼女の事を考えていました。ですから振り返ればやはり私は彼女の事が最初から気になっていたのです。

一目惚れが無かったとしても、男にとっては一目欲れという事はあり得ます。初めて見て、その女性の事を欲しいと思う事。彼女の容姿や身体を見て、やりたい、ものにしたいと思う事。とどのつまりそれは性欲です。一目欲れ（ひとめほれ）、あるいは一目欲（ひとめよく）と私は呼んでいます。

一目惚れと一目欲れは違うものなのでしょうか。そもそも恋愛と性欲はどう違うのでしょうか。時折、私はわからなくなります。一目欲によって結ばれた男女と、時間をかけて恋愛関係で結ばれた男女との間には、どれほどの違いがあるのでしょうか。一目惚れならぬ一目欲れで結ばれた男女の間にも、絆という物が生まれるものなのでしょうか。

背が高く、眼つきがきつく、険しい表情をして、どこかぶっきらぼうな態度で会話をする女子生徒。先程も述べたように、彼女は男子生徒の間では取り立てて人気がある方ではありません。無口なイメージで人を寄せ付けないので、同性の友達も少なく、学校では孤立した存在です。三年になって真梨とクラスが同じになった時、彼女に本当に友達がいないという事に私は驚かされました。女子生徒というものは、いつも何人も集まっておしゃべりしているものだと思っていたからです。真梨がクラスの

中で会話をする女子は、せいぜい一人。あとはずっと休み時間でも一人で過ごしています。私は少し彼女の事が不憫になりました。かといって、私が彼女に話しかけ、友人として休み時間を一緒に過ごすわけにはいきません。女子生徒と一対一で過ごせば、付き合っていると思われてしまいます。小心者の私にはそれは耐えられません。静かで人のいない美術室ならともかく、クラスの生徒たちが見ている前で彼女に堂々と話しかけるような勇気は私にはありませんでした。

彼女が人と接する時にぶっきらぼうな言葉遣いをし、ある意味では人を見下しているような態度を見せるその理由は、彼女の家庭環境にありました。これは後に彼女と付き合うようになり、彼女の事をよりよく知るようになった後に理解出来た事です。

彼女の家は、歴史を持った名家の家系です。名家だった、と言う方が正確かもしれません。歴史のある時期に、有力な武家だった彼女の家は戦いに敗れ没落したのです。しかしそれでも長い間、この小さな町では彼女の家は尊敬される立場にありました。今では経済的にも落ちぶれ、古くなった屋敷が残っているだけですが、プライドだけは受け継がれたのです。経済優先となった世の中で、彼女の家系はもはや地方の社会でも見向きもされない存在となりました。けれども嘗ては由緒ある武家だったと

いう誇りが今でも真梨のご両親や祖父母には残っていて、そんな中で真梨は育てられたのです。

誇りは人を孤立させます。歴史の中で、真梨の家、嵩山家を打ち破り没落させたのは大倉家です。没落の一途を辿った嵩山家に対して、大倉家は繁栄し、戦後も商売を独占して地元の町で権勢を振るい、住民の尊敬を集めています。真梨の家、嵩山家の人間はその状況を良く思わず、次第に世を呪うような精神となり、地域社会の中で孤立を深めていったのです。

そんな家系で、没落の歴史が刻まれた古い家の中で、偏屈な両親の下で一人っ子として育ったのですから、真梨が周囲とコミュニケーションが取れない偏った性格になるのも無理は無い事なのです。

そんな彼女にとって、アート、絵画の世界は、唯一の自己表現の場であり、また逃げ込む事の出来る場所だったのかもしれません。それは殆ど、彼女にとっては唯一の希望だったのだという事が、今では理解出来ます。

2～古谷次雄

古谷次雄。ふるや、つぐお。それが私の名前です。取り立てて特別な部分はありません。真梨のように歴史ある名家の出身という事もなく、農民、市民として生きてきた庶民の出身です。おそらく先祖もずっと、権力者から虐げられ、奪われ続けて生きてきたのではないかと思います。

だからこそ私は勉強に力を入れて、安定した職業に就いて、この田舎の町を出ようと考えていました。この狭く閉鎖的な地方の小さな町に居ても、自分には明るい未来は用意されていないように感じていたからです。

私は子供の頃からいじめられっ子でした。中学二年生の頃が一番ひどく、私はクラスメイトの男子からいつも暴力を振るわれていました。大倉栄三という餓鬼大将がいて、そいつがクラスのボスとなり、男子生徒達をまとめていました。餓鬼大将というよりは、不良の親玉といった感じでしょうか。その大倉に目を付けられたので、私はクラス全員からシカトされ、暴力を振るわれ、そして馬鹿にされるようになりました。それはいわば不満のはけ口です。大倉を中心にしたピラミッド構造の中で、私は

底辺となり、学校という小さな社会の中での矛盾や不満を一手に引き受ける立場となったのです。

大人になった今では、大倉がこの田舎の町で昔から権力を持った家柄の三男坊であり、周囲の生徒達も、あるいは教師達ですら、彼には逆らえないという事がわかります。それは田舎の町の社会構造がそうなっているからです。しかしまだ子供だった中学生の頃にはそんな事は理解出来ません。私はわけがわからず、なぜ自分だけがこんな目に遭うのか、なぜクラスの他の生徒は楽しそうに友達と学校生活をしているのに、自分は孤独でこんなに辛い思いをしているのか、ただ悩み続けました。私は前歯が一本欠けています。それはこの中学二年生の頃に大倉に何度も殴られるうちに歯が折れてしまったのです。普段はまったく気にしていませんが、時々夜中に舌の先で歯の欠けた部分に触れると、あの頃の辛い思いが甦る事があります。

大倉の立場は真梨とは逆ですが、ある意味では少し似通った部分があります。プライドの高さと、生まれつき周囲の人間を見下しているような傲慢さ。それは家庭や育った環境が作り出したものであり、必ずしも本人のせいではありません。しかし大倉の場合はその傲慢さが人を支配し、自分の思い通りに他人を動かす方向に出るのに

対して、真梨の場合は静かだけれど言葉や仕草の端々に冷たい棘となって他人をチクリと刺す方向に現れます。人に危害は加えないけれど、没落して権力を持たないぶん、人を見下した態度は他人に悪印象を与えます。なんだかイラっとくる女。同級生の男子生徒達が、真梨に対して共通して持っていた印象は、おそらくこのようなものだったのではないでしょうか。十代の若者である生徒達にとっては、この地方の歴史や、そこにある家系などは関係無いのですから。

　アートや絵画に救いを見出していた真梨と違い、私が美術部に入ったのには深い理由はありません。私が部活動をやろうと思ったのは友人を作るためです。中学時代を通じていじめられっ子だった私は当然友達がいません。辛い思いをしながら必死になって勉強に取り組み、私は市内で唯一の進学校に入りました。進学校には成績の良い生徒が集まり、総じて真面目な学生が多いものです。ですので暴力沙汰が起きたり荒れた校風にはなる事は無く、いじめとは無縁の平和な学生生活が手に入ります。私としては暗かった中学生活のぶんを少しでも取り返すために、部活動を通じて友人を作りたかったのです。しかし卓球部の門を叩いたものの、私の運動神経の無さは予想以上で次第に練習に着いて行けなくなりました。

美術部を選んだのは、運動しなくて済むように文化系の部の中から選ぼうと考え、その中でなんとなく興味を持ったというだけの理由です。しかし実際に入部してみると自分の絵の才能の無さを思い知らされました。もともとアートに興味が無く、芸術の知識も無いため有名な画家の事さえもわかりません。

しかし絵画や芸術の知識が無いという事は、ある意味では良い方向に働きました。三年になってから、私は美術部の活動の中で、次第に意識して真梨に話しかけるようになりました。それまで一年半の間、ほんの時折しか言葉を交わさなかったにも関わらずです。私は美術の本や画集の中で、わからない点や知らない画家について真梨に聞きました。率直な質問をしたせいか真梨も丁寧に教えてくれました。私が真梨に話しかけるようになったのは、同じクラスとなり、クラスで孤独な彼女の姿を見て同情したからという理由が大きいです。しかしそれまでもずっと心の奥で彼女に対して持っていた仄かな好意があったからというのも事実です。

私が真梨と話が合ったのは、お互いに一人っ子だったからという理由も大きいかもしれません。一人っ子の家庭で育ち、会話のペースが同じだったという事が、私と彼女の間で波長が合ったひとつの理由です。

私の名前は「次雄」と名前に次の字があるのに、一人っ子で長男なのを不思議に思うかもしれません。私の父は出しゃばらず謙虚な人間になるようにという意味で、私にこういう名前を付けたのです。人と争う事をせず、他人に一番を譲って自分はその次でいい、そのような大きな心を持った人間になりなさいという意味です。この小さな田舎の町で常に人から支配されて生きてきた祖先の知恵が、そこには込められているような気がします。実際に私の祖先は江戸時代には他の農家が打ち捨てた山間の地に住み着いて耕し、そこから時代が降って古谷という姓を付けたのだそうです。他人が耕作して打ち捨てた谷を受け継ぎ、そして自分は一番ではなく他人の次でいい。名前というものは不思議なもので、私の人生は確かにその通りになっています。

三年になり、私が真梨と言葉を交わすようになってから、私は次第に自分の中にある彼女への思いを意識するようになりました。はっきりと「好き」というふうには考えませんでしたが、私はなるべく毎日、一日に一度は彼女に話しかけ、絵についての何らかの質問をするのを目標にしていました。そして彼女に話しかける度に、私の中で心地よい感情が生まれ、私はそれを楽しみにするようになりました。

クラスでは女子生徒に自分から話しかけるなんていう事はとても考えられません。けれどこの時期には美術部員は少なくなっていて、部には二人の後輩がいるだけ。常に来ているわけではないので、時には私と真梨の二人だけとなる事もありました。そんな誰もいない二人だけの空間で、誰にも邪魔されないゆっくりとしたペースで彼女と言葉を交わす事が出来る状況は、今から考えても天国と呼べるものでした。

そんなふうに部活動という場で、時には二人だけとなって会話を交わしつつも、私はそれ以上の積極的な行動は取りませんでした。それはやはり、私にとって恋愛というものは遠い所にあるものだったからでしょう。学生の本分は勉強であり、私の目標

は受験競争を勝ち抜いて東京の大学へ進学する事です。学生時代は青春とはいえ、今このタイミングで誰かと恋愛し、関係を深めるという考えは頭の中にありませんでした。そしてそれ以上に、私は自分の気持ちに鈍感でした。私は自分が彼女の事をどれほど好きなのか、最後の最後まで気付きませんでした。そして振り返ってみれば、気付いた後もほとんど何も出来ませんでした。つまり私は野暮であり、のろまであり、そして間抜けだったのです。確かに私は望み通り受験競争に勝ち抜いて、第一志望の大学へと進学しました。しかし男としては……一人の男としては、私は現実がまったく見えていない間抜けだったのです。

やがて自分がピエロのような役割を演じる事を、この時の私は想像もしていませんでした。

7月のある日、私と真梨の心の距離がぐっと縮まる出来事がありました。きっかけは秋の展示会に出品する作品の話をした事です。私達の学校の美術部では、毎年市が主催する展示会が春と秋にありました。部活動というのは三年の夏までですから、美術部員にとっても三年の夏に仕上げる作品が最後の作品となります。つまり、この三年の秋の展示会は私達にとって最後の展示会となるのです。

「嵩山さんは、秋の会の出展はどうしようと思ってるの？」

どうしようと思っているのか、そういう聞き方をしたのは、三年秋の出展については必須では無く、各生徒の自主的な判断に任せられているからです。秋の展示会に出品するためには、夏休みを通して絵を描き、仕上げる必要があります。しかし三年の夏休みは受験勉強にとって大切な時期です。そして私達の通う進学校では受験は絶対です。ですので多くの場合、三年の部員は秋には出品せず、一学期を以て部活動を終了する事になります。ですがあくまでそれは生徒の自主性に委ねられているので、私は真梨に意向を聞いたのです。

「わたしは出品しようと思ってる」

いつものように真梨はどこか冷たさを感じるぶっきらぼうな声色で、けれどはっきりと言いました。

「え、そうなんだ。僕はやめておこうと思ってるんだけど……」

「古谷くんは成績がいいから、勉強に集中した方がいいでしょう。でもわたしにとって絵は大事なもの。私は納得のいく絵を描きたい」

そう言って真梨は大きな目で私の顔を見つめました。骨格がしっかりしていて、表情が少し険しいところのある真梨にまっすぐに見つめられたら、慣れない人はたじろいでしまうかもしれません。彼女が学校で孤立している理由のひとつです。けれど彼女がこうして私をまっすぐ見つめて話をしてくれるようになったのも、ここ1、2ヶ月の事なのです。それは私にとっても、真梨にとっても……互いに友人の少ない私達にとっては……大きな進歩と呼べる事でした。

「わたし、今度の作品ではもっと自分の色を出してみたい」

「自分の……色……？」

真梨が言った事の意味がわからず、私は不思議な顔で聞き返しました。

「そう。誰かの模倣や、過去の繰り返しじゃなくて、私だけの表現をしてみたい」

そう言って真梨は首をかしげるような姿勢になり、どこか遠くを見るような表情になりました。それは彼女が自分の好きな画家や、アートについて話す時の無意識の癖です。振り返ってみれば、彼女が私に自分の思いを話してくれたという事は、この時いかに彼女が私に心を開いてくれていたかという証でもありました。

「この前、マリエルについて話をしたね。それから先週はローネの絵を見た。わたしはあの時代の絵も嫌いでないけれど、本当はもっと違うものが好きなの」

こういう時の私は、聞き役に徹する事しか出来ません。うん、うん、と頷きつつ、どこか遠くを見ている彼女の顔を見つめます。その頬は、心なしかピンク色に紅潮しているように見えました。

「今はわたし、クラウチに夢中になってるんだ」

「く、クラウチ……？」

彼女が有名な画家の名前を挙げて、私がそれを知っていた事はほとんどありません。この時も私は首を捻るだけでした。そんな私に対して、真梨は訥々と、クラウチという画家についての説明を始めます。いや、画家というよりは、アーティストという言い方がしっくり来るかもしれません。

クラウチというのは現代のストリートアートの巨匠でした。都市の中で、建造物や道路、外壁といったものをキャンバスに見立てアートを描く、グラフィティーと呼ばれるアートで有名な画家です。神出鬼没のアーティストとして知られ、世界中の大都市でストリートのアートを描き続ける、カリスマ的な存在なのです。真梨は自分の鞄の中から小さな冊子を取り出して、そこに掲載されているクラウチの絵をいくつか見せてくれました。

「どう?」

頬を赤くして、何かを期待するような上目遣いで真梨は私に聞きます。

「ど、どうって……僕はちょっと、うーん……こういうのはまだ、わかんないかも……」

私がそう言うと、真梨の顔にさっと落胆の表情が浮かび、それを察した私は気まずい思いになりました。

そしてその日の会話は、そこで終わってしまいました。

私はまずい事を言ったかなと後悔していました。真梨は私に、自分のお気に入りのアーティストの絵を見せて、私にも同意して欲しかったのです。けれどもピンと来ない反応をしたために、彼女を落胆させてしまいました。

正直なところ、私はクラウチの作品を見て、あまり好きじゃないなと思いました。今では少しは理解出来るようになりましたが、当時はさっぱりでした。真面目だった

私にはストリートアートという物が理解出来ませんでした。都市の中や建築物に描くストリートアートは、厳密に言えば違法なものです。法律を破って、他人に迷惑をかけてまで描くアートに意味があるのだろうかと、私はそんなふうに感じていたのです。

そんな違法行為によって作られたアートを、真梨が好きだと言った事が意外でした。真梨は真面目に絵画に取り組み、正統派の絵を丁寧に描く女の子だと思っていたからです。でも本当は、犯罪すれすれの行為によって描かれた、不良達がたむろするような路地裏のストリートアートが好きだった。その事がショックでした。

けれどクラウチの話をする真梨の目は生き生きと輝いていました。私にとって、彼女のそんな表情を見るのも、そんなふうに熱心に自分の思いを語る姿を見るのも初めてでした。

私はそんなふうにクラウチやストリートアートに夢中になる真梨に、心のどこかで嫉妬していたのかもしれません。

4～プレハブのクラウチ

翌日、授業が終わって美術室へ向かうと、そこには真梨が私の事を待ち構えていたように座っていました。そして彼女は私の姿を見るなりきっぱりとした口調で言いました。

「古谷くん、クラウチを見に行こう」

「え、何？　どういうこと？」

「いいから行こう」

はいもいいえも言う余地はありませんでした。彼女の中では、それはもう決まっているのです。思い立ったら、人の都合など考えない。真梨らしい言動です。人の気持ちを考える事が苦手な彼女は、こんなふうにして何人もの友人を無くして来ました。

けれど今、やっと自分の思いを受け止めてくれるかもしれない相手を見つけました。それが私だったのでしょう。

部室に来たばかりにも関わらず、私達は鞄を持って美術室を飛び出し、そして学校を飛び出しました。足早に歩いていく真梨を私は追いかけます。彼女はほとんど後ろを振り返りません。私が一緒に着いて来ているという事を確信しているかのようです。半分走るようにして歩きつつ、私は彼女に声を掛けようにも言葉が見つかりません。戸惑っているうちに目的の場所に辿り着いたのか、彼女が足を止めました。

そこは山間に入っていく細い道の脇にある、小さな小屋の前でした。

舗装されていた道はもう途切れていて、両脇に草が生い茂った砂利道になっています。フェンスに囲まれた敷地は何かの資材置場なのでしょうか。山道の入り口なので、すべて覆われているわけではありませんが、敷地の奥の方は木々の枝の下になっています。工場のように見えなくもありませんが、そこに置かれた建築資材は錆びていて、ここが現在は使われていない土地なのだという事がなんとなくわかりました。

「これなの」

真梨の言葉が、目の前にある小さな小屋の事を指しているという事は明白でした。

山道の脇にある使われていない資材置場。その一角にあるプレハブの小さな小屋。おそらくは事務所として使われていた筈のその建物は、一面くまなくポスターで覆われていました。一面、いや、四面全部と言っていいでしょう。その小さな小屋の外周は、上から下まで、これでもかというくらいにポスターやステッカーなどの掲示物で埋め尽くされています。私達はその小屋に近づき、そこに貼られた物を、ひとつひとつ見ていきます。イベントのポスター、労働組合のポスター、政治家の顔が映った政党のポスター、ロックバンドのポスター、アイドルのグラビア、スケボーやスノーボードのステッカー、その上からグラフィティーのような文字が描かれていたり、どこかの暴走族のようなマークが描かれていたり、まさに無秩序な状態です。

おそらく、最初は政党や社会運動のポスターが貼られていただけだったのでしょう。それがいつしか少しずつジャンルを広げ、様々な人々が自己主張するようにポスターやステッカーを貼り、それを皆が真似するようになった。その結果が、この状態

なのではないでしょうか。私達の町は田舎ですから、都会にあるようなストリートアートはあまり見かけません。しかし、この人目につかない山道の小屋に、それぞれが存在を主張するように自分の証を残しています。好きとか嫌いではなく、あまりにも度を越した生命のパワーを感じるようで、私は圧倒されました。

小屋の裏側を見ようとすると、そこはもう敷地の中です。入り口にあたる場所なのでフェンスは途切れていますが、そこが誰かの所有する私有地の一角である事は明らかです。私は、厳密に言うとこれは不法侵入になるのではないかと不安になりましたが、目の前のアートが発散する魅力とパワーに、その思いは掻き消されました。つまり私は、これをアートだと認めていたのです。この小屋全体を、ひとつの大きな芸術作品として認め、そして感動していました。

そして、小屋の裏側、その真ん中にそれはありました。

裏側という言い方は正しくありません。道路から見て裏側というだけで、そこは実際は小屋の正面であり、中に入るためのドアがそこにあるからです。このプレハブの小屋にも窓があります。しかしその窓にはステッカーやポスターが貼られ、中を見る

事はできず窓の役割は果たしていません。そしてその窓の中心に、色褪せて剥げかけた一枚の絵がありました。

「うわあ……！」

思わず漏れたその一言に、私の驚きが集約されていました。

それは翼を広げた天使の絵でした。英語で文字が書かれていて、それが何かの社会運動のポスターである事がなんとなくわかりました。よく見ると天使は人間の顔をしています。それは肌の色が濃く、日本人ではありません。しかしとても意志の強い、いきいきとした力強い目をしています。それは人間と天使を組み合わせたアートでした。人間は本来、天使なのだという事を描いているのです。また同時に、社会の中で少数派である人々が、自由になり飛び立って夢を掴むというメッセージが込められているのです。

それだけでも強烈なメッセージと言えますが、私が驚いたのはそのポスターが半分近く破れ、剥げかけており、そして色が褪せているその様子でした。風雨に晒されて痛んだポスターの状態が、余計にアートの迫力を増していたのです。それはまるで、

夢を信じる心は、たとえ世間の雨風に晒され、痛み傷ついたとしても、不滅なのだと訴えかけているようです。それが無秩序に貼り重ねられた他のポスターやステッカーに混じって、その中心となるかのように輝いている……

この痛んだポスターが持つ迫力を目の当たりにして、アートというものはただ描くだけでなく、それが世界の一部となり、生活の一部となる事によって、より大きな意味を持つのだという事が、私にも理解出来ました。

「これがわたしが一番好きな、クラウチの作品」

驚きに言葉を失っている私の隣で、真梨がそう言いました。彼女は私のすぐ隣、肩や手が触れそうなほど近くに立って、その絵を見つめています。

「凄い……凄いよ……。僕はアートの才能は無いし、クラウチの事もよくわからないけど、でもこの絵は凄いと思う」

私がそう言うと、彼女はこちらに顔を向け、にっこりと笑いました。近くに立っているので、息がかかりそうな程です。彼女は人との距離感が壊れているのだという事を、私はこの時感じました。そしてそれは私が初めて見る、真梨が心から笑った顔でした。普段の険しい表情は嘘のように消えて、そこにいるのは本当に美人で可愛らしい、まさに絵の中の美少女です。そんな彼女の一番の笑顔を至近距離で見せられ、私は心臓の高鳴りが止まらなくなりました。

真梨は私の隣に立ったまま、クラウチについての話を続けました。私がクラウチの作品に感動したのがわかり、彼女も嬉しかったのだと思います。普段無口な彼女が珍しく喋り続け、次第に私は立っているのがしんどくなってきました。しかも手と手が触れそうなほど近くに立ったままです。ある意味では勿論嬉しいのですが、しかし今は夏の盛りの七月です。私は汗をかき、次第に暑くなってきました。先程早足でここまで歩いて来たので尚更体温が上がっています。

空気が読めない。そして周囲の状況が目に入らない。そんな真梨の性格の欠点が、この時も発揮されていました。きっと真梨も暑いに違いないのです。けれど自分の好

きなアートについて語り、それについて自分の思いを伝えたい、その気持ちに夢中になる余り、他の事が考えられないのです。

そして私は自分達のいる場所の状況も気になりました。今は使われていない場所とは言え、ここは他人の所有する土地です。どこかの会社が所有する資材置場なのです。そしてここは山間の脇道にある山道の入り口で、周囲には誰もいません。誰もいないという事は、本当に誰もいないのであれば問題無いのですが、もし誰かが来た時の事を考えると心配なのです。誰かが来た時、私達二人を見たらどう思うでしょうか。手と手が触れそうなほどに隣同士に立っている学生の私達を見てどう思うでしょうか。それがこの資材置場の関係者だったらどうでしょう。もしそれが、この小屋に自分達のステッカーを貼りに来た暴走族や不良グループのメンバーだったらどうでしょう。

私は暑さを我慢しながら、すぐ隣の真梨に目をやります。クラウチについて熱弁を振るう彼女の顔は紅潮して、やはり汗びっしょりです。汗で揉み上げに産毛が貼り付いて、なんだか色っぽく見えます。夏服のブラウスの背中は汗でぐっしょりと濡れ、

彼女の背中の肌色とそこにあるブラジャーの肩紐が透けて見えてしまっています。そして前は……私にはとても見る勇気がありません。そんな状態になっているのに、彼女にはまったく自覚が無いのです。

目を合わせるのが、そして彼女の胸元を見るのが気まずかったので、私は視線を下に向けました。その拍子に、私の視線に入ってきたのは彼女のスカート、そしてその布地に包まれたお尻の膨らみです。真梨のお尻は大きいのです。その事に、今更のように私は気付きました。

（大きい……それになんていい形をしてるんだ……）

そう思った時、私は自分の頭の中で、このお尻に触れられたらどんなにいいだろうと考えてしまいました。すぐ隣に立っているのですから、ほんのちょっと手を動かせば、彼女のお尻に手が届きます。背の高さが同じくらいなので、私の手のひらはちょうど彼女のお尻の位置にあるのです。

真梨が一生懸命になってアートについて話しているのに、私はそんなエッチな事を考えてしまった自分が恥ずかしくなりました。けれども一度考えてしまうと、興奮でもう彼女の話は全然頭に入ってきません。

（嵩山さんは……彼女はこんなに綺麗な女性だったんだ。こうやってすぐ近くで見ると、スタイル抜群だし、お尻が大きくてたまらない。僕の恋人にしては少し背が高すぎるけれど……）

僕の恋人……

そう考えて、私はパニックになり赤面しました。嵩山さんはまだ僕の恋人なんかじゃない。ただ美術部で毎日のように会って、アートの話をしているだけ。そして今日はこうして、秘密の場所にあるお気に入りのアートを一緒に見ているだけ……

秘密の場所に一緒に行って、大切なものを共有する。

それってもう特別な関係じゃないのか……？

これはもしかすると、デートなんじゃないだろうか……？

私は混乱し、赤面して汗をかき、頭がくらくらとしてきました。しかしそれはよく考えれば半分以上は暑さのせいに他なりません。

「ねえ、もう行こうよ、嵩山さん……このままだと、僕ら熱中症になっちゃうよ」

「え？　あ……そうね。その通り。うん、行こう」

真梨はそこで初めて気が付いたようで、クラウチの話を止めると、あっさりと帰る事に同意しました。その後の人生で何度も繰り返す事になる、暴走する真梨を私が止めるという役割。これはその最初の時でした。

自然と私達は一緒に家路を帰る事になりました。話を聞いてみると、私の家と彼女の家は思いの外近かったのです。夏とはいえ、もう暗くなってくる時間です。そんな中で、汗でブラジャーが透けて見える状態の真梨を一人で帰すのは心配でした。もっ

とも私は身長165センチの貧弱な体格をした、運動神経ゼロの元いじめられっ子です。もし彼女に何かあっても守れる保証は全く無いのですが……

一緒に歩いていて、私は気恥ずかしさと気まずさを感じていて、彼女の顔が見れません。

理由はいくつもあります。私のような内気な小心者にとって、クラスメイトの女の子と一緒に歩いているというだけでも気遅れするには十分なほどです。私は先程、真梨が真剣にアートについて話しているのに、彼女の透けた肌をちらちらと見つめ、そして彼女のお尻が気になって目が離せなくなってしまいました。今もそうです。気まずいから視線を下に向けますが、そうすると自然と彼女のお尻が視界に入り、視線がそこに釘付けになってしまいます。

（僕はお尻フェチなんだろうか……？）

私は思わず自分に問いかけました。その答えはその後の人生で次第にわかって来ます。私は女性一般のお尻が好きという意味での尻フェチではありません。私は、真梨

のお尻が好きなのです。真梨のお尻だけが特別に素晴らしく、だから特別に好きなのです。

この日は、私が初めてクラウチの絵の良さに気付いた日であると同時に、初めて私が女性としての真梨の魅力に気が付いた日でした。

だからこそ資材置場で暑さを我慢しながら、私は不安な気持ちに襲われていたのです。真梨のこのお尻を、他の男が見たら。汗に濡れて透けた素肌を、どこかの知らない男が見てしまったら。きっとその男は、一目惚れならぬ一目欲をしてしまうのではないか……

たとえ名前も知らない男であっても、真梨のお尻を一目見たら、それだけで彼女に魅せられてしまうのではないか。

そして、その結果、彼女は……

「わたしの家はここなんだ。今日は本当にありがとう。一緒に見てくれて嬉しかった、あの小屋のクラウチ」

彼女の明るい声に私ははっとして現実に戻りました。
彼女の家は、私の家から歩いて2分もかからない距離にありました。ただ、小学校や中学校の校区でいえば、境目を挟んで違う区分けになってしまうので、これまで学校が同じになる事が無かったのです。

（なんだ、じゃあ、もう少し家の場所が違っていたら、小学校や中学校も、嵩山さんと同じだったんだ……）

私はなんだか運命を恨みたくなりました。
こんなに近所に住んでいたのに、今まで会った事が無かったなんて。
もっと早く出会っていたら、もっと早く仲良くなれたかもしれない。
僕がもし彼女と同じ中学校だったら……そしたら大倉にいじめられる事も無く、その代わり真梨と一緒に楽しい学生生活が送れたかもしれないのです。

そうしたら、私の人生はもっと違ったものになっていたでしょう。

体験版はここまでとなります。
続きは製品版にてお楽しみ下さい。

©八ヶ岳昌司　２０２６年

ブログ　寝取られと純愛　ntrlove.com　（不定期稼働中）

表紙絵および挿絵（サービス画像）ＡＩによる生成

本文の執筆にはＡＩは使用しておりません。